

「私はこれからも、あなたのことを決して忘れない」

—まえがきにかえて

薄れさせてはいけないと繰り返し記憶に刷り込む

あの時に感じたことが本物である。風化した後の今の印象でものを考えてはならない。

.....

これからすべてを忘れないこと。

今も、これからも、我々の背後には死者たちがいる。

(池澤夏樹『春を恨んだりほしくない』より)

東日本大震災が、2011年3月11日14時46分に日本を襲った。そして、それからまもなく1年が経過しようとしている。私たちは今、「あの時に感じたこと」(池澤夏樹)を記録し、それを後世に語り伝えるために、「東日本大震災をどう受け止めたか—3.11以後、日本再生への道」を刊行する。私たちが震災をめぐって感じたこと、考えたことを「薄れさせてはいけない」記憶として残しておきたいと思う。

被災して亡くなられた方々の御魂^{みたま}に向い、「私はこれからも、あなたのことを決して忘れない」と鎮魂の言葉を捧げたい。ブックレットをまとめるに当っては、さまざまな思いがこみ上げ、ためらいがなかったとは決していえないが、発刊に踏み切ることにした。本書の出版が多くの犠牲者や被災者の方々に対して、非礼に当たらないことを切に願っている。

2011年の春は震災の影響で、早稲田大学は3月25日の卒業式も、4月1日の入学式も取りやめ、5月になってようやく授業が開始された。これは早稲田大学始まって以来の異常事態であろう。卒業式の3月25日、私は密かにゼミ生たちを大学に呼び集め、手製のゼミ修了書を一人一人に向かって読み上げ、手渡すことが出来た。

それから私は、5月から始まった新学期に2つのゼミ(テーマカレッジと学部ゼミ)のテーマを、3.11の震災に関する事に絞ることに決めた。学生たちに「東日本大震災をどう受け止めたか」と、それに対して「何ができるのか」について議論をしてもらい、レポートを書いてもらった。

この文集の一部は、ゼミ生たちの文章から成り立っているが、さらに私の同僚や大学院生、支援活動を行っている私の仲間にも、同じテーマでエッセイを書いてもらうことにした。

私たちは、この大災害を風化するにまかせるのではなく、少しでも記録にとどめておき、そこから日本再生のヒントを探り、復興のお手伝いをしていきたいと思う。それが、この文集を刊行する意図である。

本リーフレットの作製に当っては、国際言語文化研究所の佐川佳之君の尽力に負うところが大きい。他に同研究所の大場静枝、池田知栄子両君の協力を仰いだ。記して、三人にお礼申し上げたい。最後に、本書は早稲田大学オープン教育センターの助成によって刊行されることを明記し、心より感謝申し上げる。

2012年2月20日

池田 雅之